

「オーストラリア・日本共同シンポジウム:レジリエンスの観点からみた災害とツーリズム」 を行いました (2023/6/21~22)

主催：オーストラリア外務省、東松島市役所

テーマ：防災、ツーリズム、国際交流、復興

会場：東松島市役所、東北大学災害科学国際研究所 多目的ホール、オンライン

URL：<https://www.dfat.gov.au/people-to-people/foundations-councils-institutes/australia-japan-foundation>

2011年の東日本大震災後、被災地の経済復興を促す観光産業の成長を促進するため、様々な観光開発政策が施行されました。それから2020年のパンデミックまで、観光客数は指数関数的に増加し、より多くの地域が観光産業への依存度を高めていきました。COVID-19のパンデミックの影響により、観光客数は2020年から2022年にかけて減少しましたが、日本が国際観光を再開した2023年には回復すると予想されています。日本の観光産業の成長により、2つの課題が生じます。第一に、観光の目的地となった受入側地域社会に関して、観光はどのように地域生活の持続可能性に貢献できるのか、また、観光が外的ショックのリスクによってもたらされる固有の脆弱性に直面して、地域社会の関係者はどのように回復力を強化できるのか。第二に、観光客に対して、観光部門はどのように災害に備え、地域の災害リスクに不慣れな観光客を支援することができるのか。

このような問題を解決するため、本シンポジウムでは、観光業が盛んであり、また複数の災害の危険にさらされていることから、観光と災害回復力に関する研究が盛んに行われているオーストラリアから、学術、産業、政府の専門家を招聘しました。日本からも学術、産業、政府の代表者が参加しました。オーストラリア外務貿易省の豪日交流基金助成による今回のワークショップでは、6月21日に東松島市での現地視察、22日にシンポジウムが行われました。

1日目の現地視察では、渥美巖東松島市長に出迎えていただきました。会議の後、2011年の震災で被害を受けた複数の地域を視察するため、東松島市から今回の参加者のために送迎と通訳サービスをご提供いただきました。参加者は、地元企業と交流し、復興過程での経験について話し合い、その後震災について学ぶために野蒜美術館を見学しました。また、参加者は地元の海藻うどんを楽しみました。

2日目は、東北大学災害科学国際研究所多目的ホールにてシンポジウムが開催され、当研究所のヌイン・デビッド特任准教授（津波工学研究分野）と井内加奈子准教授（レジリエンス計画研究分野）が事務局を担当しました。日本とオーストラリアからの12人の講演者に加え、22カ国以上からのゲストが対面、またはオンラインで参加しました。上山真知子特任教授（客員）（歴史文化遺産保全学分野）も講演者の一人として参加、また、国連世界観光機関（UNWTO）、国連開発計画（UNDP）、仙台空港などの代表者も参加しました。シンポジウムは3部構成で行われ、午前の部は日本、午後の部はオーストラリアに関する発表、そして最後の部は午前・午後の部の課題についてのディスカッションが行われました。

シンポジウムの終わりには、2日間にわたる知識交流により参加者は日豪間の協力関係の継続にますます関心をもち、今後の研究活動の方向性について確認しました。

文責：ヌイン・デビッド

（津波工学研究分野、地震津波リスク評価（東京海上日動）寄附研究部門）
（次頁へつづく）



東松島市の津波犠牲者慰霊碑を訪れる
日豪の参加者



東松島市の海藻うどんを食べながら
東松島市の復興について話し合う参加者



又イン特任准教授が参加者に
東北の歴史を解説



シンポジウムに対面で参加した参加者の
集合写真